

## 卒業論文の要旨

論文題目	知覚哲学諸説のワインテイastingにおける実践 ～ソムリエから見たセンスデータ説と副詞説～
氏名	一平永太郎
メジャー	文化人類学
(要旨)	
<p>本稿では嗜好品としてのワインとそれを独自の技法と文化によって知覚し嗜むワインテイastingについて、現在、知覚哲学において有力とされる諸説がどのように適用可能であり、またどのような不具合が起こるかを検討し、それら諸説の有効性を批判的に論じたものである。</p> <p>まず、各諸説がウィリアム・フィッシュの提唱する知覚の三原理(共通要素原理、現象原理、表象原理)に対しどのような立場をとるのかを確認したうえで、「ワインは実在し、かつワインを味わう時、それを味わう主体の心的状態によってその知覚の結果に違いがあり、かつワインは表象的である」というワインテイastingの一般的な理解が、知覚哲学の諸説において、どこまで維持できるかを検討した。</p> <p>第一の説であるセンスデータ説は単純な五感に限られない仕方で感覚知覚の対象を導入できる点で、ワインテイastingの際にしばしば行われる非常に複雑な言語表現ととても相性が良い。その一方で、センスデータとはそもそも何であるかという、この説が抱える難点が、ワインテイastingの認識論的な曖昧さにそのままつながってしまうことが明らかになった。またセンスデータ説は一般的に表象原理を受け入れないと考えられているが、これはワインテイastingにおいて致命的になる。なぜならワインは産地や樹種などを表象するものであると考えることが、ワインテイastingの基本だからである</p> <p>第二に検討した副詞説はセンスデータ説への批判に対し説明を行えるよう設計された説である為、その知覚理論を、ほとんどの不一致を起こすことなくワインテイastingに適用可能であった。だが副詞説は、知覚主体の多様で無数の知覚経験を説明できる一方、多くの感覚知覚に傾向性が存在することを十分に説明できていないように思えない。その点において副詞説は、ワインテイastingを行う際に重要な他者への説明の可能性や、共感がなぜ可能なのかについて、多くの課題を残している。</p>	
(指導教員の推薦のコメント)	
<p>本論考は知覚の哲学の諸理論をワインテイastingにおいて応用・実践した場合に、各理論がどのような長所・短所があるのかを比較検討したものである。著者自身のワインテイastingの知識・スキルを活かしながら、難解な知覚の哲学の魅力を、日常のフィールドで生き生きと論じることに成功しており、極めて優れた応用哲学の研究となっている。ワインを哲学的に本格的に論じる研究(“Philosophy of Wine”)は海外では散見されるが、我が国ではほぼ先行研究は存在せず、その点においても貴重な論考となっている。もっとも、本論考ではセンスデータ説と副詞説しか扱われていないので、議論の可能性が十分に検討されているとは言えない。だが、著者にしか展開できない非常に挑戦的で独創的な議論は優秀卒業論文として推薦するに十分値する。</p>	